

紙つて

東日本大震災の原発事故で科学への信頼が大きく揺らいだとされる。しかし、人類叡知の名譽をかけて、断固否定したい。原発を可能にしたアインシュタインの「特殊相対性理論」、国民が放射線による損傷を恐れた「DNAによる遺伝子情報伝達」。この二つの科学原理は微動だにしていない。

信頼を失ったのは一部の科学者、リスク管理を誤った企業経営、行政体制。社会へ科学的合理性ある情報提供をすべきところ、準備不足が露呈した。猛省を促したい。科学者には責任ある発言と行動が求められる。原子炉の放射性物質飛散の安全性、危険性についても、恣意的な発信で社会を混乱に陥れてはいけない。受け手が専門家か一般社会かで発信のプロセ

治良 依野

科学は揺るがない

ス、目的、影響はまったく異なる。

安全か危険かは二者択一ではなく、リスクゼロもあり得ない。科学者の知識は限定的で、当然見解も同じではない。緊急時にこそ、専門学会が知恵を結集して事実を把握し、整合した見解を出すべきだった。一つの結論でなくても、また結論が出せなくても意味は大きかったはずだ。メディアも特定の意図を避け、大局的かつ公正を期してほしい。

人間は理性と感情を合わせ持つ。客観的な安全性、危険性の判断と、主観的な安心、不安の感情は別ものである。寺田寅彦の言う「正当にこわがる」ためには信頼できる科学的根拠の提示とその理解が不可欠だ。非科学的な過信が原発に安全神話をもたらし、不要な不安がさまざまな風評被害をもたらした。(理化学研究所理事長)

2013.2.18